JICA ボランティア活動報告　２　　２０１６年１２月

北橋　雅子

モザンビークの大学で情報技術を教えています。前回の報告で、キルギスでの苦労が役に立っている実感がある、学生の学びたい気持ちと私の教えたい気持ちがうまくかみ合っている感覚がある、と書きました。それについて詳しく報告します。

キルギスでも大学で教えたのですが、最後まで気持ちがかみ合わなかったのです。それはなぜなのか、任期中はもちろん、帰国してからもずっと考えました。テストと評価に関する認識が違う、とずっと感じていました。それはキルギスだけでなく、モンゴルでも感じたことでした。どこがどう違うのか、モンゴルでも考えさせられました。私はオーストラリアでの教員経験を通して、自分の評価方法とその方針を生徒達に認知させなければならない、ということを学んでいました。モンゴルでもキルギスでも、そのやり方を通したのですが、うまくいかなかったのです。

私がオーストラリアで身につけたテストと評価に関する認識は、日本のそれとは違う、と感じました。その違いを簡単に説明することは難しいのですが、あえて簡単に言ってしまうと、先生と生徒の間に評価について共通の認識がないという前提で、だからその価値観をすり合わせて互いに納得できる領域を確認する必要がある、というのがオーストラリアのやり方です。日本には、評価の方針について生徒と合意をとる、という発想はないと思います。そんなことをしなくてもすでに合意がとれているからです。それは必ずしも明文化されていないのですが、暗黙の了解となっているのです。その評価に関する価値観は、日本で教育を受けた私の中に、言語化されずに刷り込まれています。

日本の暗黙の了解がそのままモンゴルやキルギスで通じるはずはないので、テストと評価に関する認識をすり合わせる作業が必要なはずだと思いました。問題はそのやり方です。オーストラリアで、私は自分の中に刷り込まれている評価に関する価値観を、生徒達に言語化して説明することはしませんでした。その代わりに、テスト問題や採点の仕方、総合評価の仕方、という形で提示していたのです。それでいいかどうか確認することができたのは、テスト問題や採点の仕方を批判的に見る回路を、生徒の側が持っているからでした。モンゴルでもキルギスでも同じように私の価値観を提示しました。しかし、それは、テストを批判的に見る目を持たない学生達にとって、全く意味をなさなかったのです。つまり、そこに彼らとは違う私の価値観が提示されていることが、彼らには全くわからなかったのです。

モザンビークでは、それを言語化して説明してみることにしました。コースのはじめに、私はこれから何を教えるのか、どう評価するのか、説明しました。２回のテストとプレゼンテーションによって評価する、と説明しました。コース内容は非常に基本的なことだからみんな必ずわかるはずだ、これがわからないと次には進めないのだ、と言いました。そして各トピックごとに学生を割り振って、そのトピックについてはその学生が責任をもってみんなにわからせなければならないと言いました。トピックごとのリーダーを決めたわけです。毎回の授業で、内容の復習をリーダーがみんなの前でします。これは最終プレゼンの練習でもあります。授業に積極的に参加することが大事なのだ、その姿勢を私は評価する、と言いました。テストも重要だが、テストができなくても心配することはない、日ごろの授業にきちんと参加していれば必ず次のチャンスを提供する、と説明しました。

内容がわからないと次には進めない、と学生には言いましたが、学生が本当に内容を理解することはあまり重要ではない、と私は思っていました。理解したい、理解できた、とちょっとでも思ってく

れることが重要なのです。授業に参加することで何かが理解できる、という体験をしてほしいのです。最終プレゼンの評価基準は、内容を理解しているか、ということより、自分の言葉で自分なりに説明できているかどうか、です。わからないところがあったら、わからないとプレゼンしてくれたらいいんだ、と説明しました。わからないと先に進めないのに、わからなくてもいい、というのは矛盾しています。しかし、そこがわからないということがわかれば、先に進めるのです。わからないからわかりたい、と思ってくれればいいのです。

これは非常に日本的な評価の仕方だと、私は思っています。これが暗黙のうちに私の中に刷り込まれた価値観だと思います。結果ではなく努力を評価する、というやり方は、何事も過程が大事だとする日本の価値観に沿っています。

努力を評価するならテストの点数は重要でないことになります。確かに私は、テストで間違えることを恐れるな、と説明しているのです。テストの点数が悪くても努力が見えれば私はそれをより重視する、と言っているのです。これを言い換えると、テストの点数がよくても、努力が見えなければ高く評価しない、ということです。だから、私はテスト問題をつくる時、努力が結果として現れるような問題にしなければならない、と無意識のうちに思っていました。つまり、授業を受けていればできる、受けていなければできない問題にしようとするのです。そのようなテストは必ずしも学生が自分の理解を確認することができるものとはなりません。

私の教師としてのスタンスは、日本で刷り込まれた評価の価値観に縛られています。私はどうしても、それに沿って学生を評価してしまいます。それをモザンビークで改めて気づかされました。評価についての合意をとる、とはつまり、この変えたくても変えられない私の評価の仕方を受け入れてもらう、ということでした。努力を評価しようとする私の傾向は変えられませんが、努力を反映するテストにしなければならない、ということはない、と気がつきました。テストしなくても、私には学生の努力は見えているのです。テストで重要なのは、学生が自分の理解を確認できることです。学生が自分で自分を評価する、その術を提供することが重要ではないか、という新たな視点を得ました。その術を提供した上で、学生が自分で自分を評価した結果と、私の評価が重なれば理想的です。

学生が私から何かを学んでくれている、というだけでなく、私も学生とのやりとりを通して新たな発見を得ている、という感覚、これが気持ちがかみ合っているということです。モンゴルやキルギスでも、これをめざしていたのにできなかった、モザンビークではどうしてできたのか、いや、本当にできたのか、まだ結論は出ていません。今、言えるのは、私の中の暗黙の了解を言語化する努力が、何らかの効果をもたらしたようだ、ということです。

南半球のモザンビークでは、１２月に年度が終了し、１月は夏休み、２月から新たな年度が始まります。来年は今年教えた１年生が２年生になります。その２年生と、新たな１年生に教える予定です。今回の報告の最後に、首都マプトの河口を挟んで向かい側にあるカテンベを紹介します。片道５メティカイス、今のレートで１０円もしないくらいのフェリーで渡れます。このフェリーは地元の人達が使っているもので観光用ではありません。マプトは高層ビルもある都会ですが、カテンベは舗装道路もありません。このギャップは、モザンビークの格差と言うか、実態を表しているように思えます。

日曜日、ちょうどお昼頃のフェリーにボランティア仲間３人で乗りました。子供達もたくさん乗っています。みんなどこへ行くのでしょう。それとも帰るのでしょうか。フェリーには車が１０台ほど乗れます。１０分ほどで対岸に着きます。時刻表はありません。２隻のフェリーが往復していて、適当に客がいっぱいになったら出発する感じです。このフェリーの他に小型のボートもあって、そっち

は１０メティカイスです。小回りのきくボートの方が往復回数が多く、対岸までの時間も半分の５分くらいのようです。

　さて、着いたらみんなでぞろぞろ桟橋を歩いて、砂浜に出ました。海はあまりきれいとは言えません。海水は濁ってる感じです。砂浜にはいっぱいゴミが落ちてます。泳いでる人が数人いました。私達は砂浜を歩いて、海に面したレストランに入り、海風に吹かれながらマプトのビル群を眺めて、ランチを楽しみました。ひとしきりゆっくりして、さあ、帰ろうと外に出たら、満ち潮で砂浜が狭くなってました。驚いたのは、来るときは数人しか泳いでなかったのに、今は狭くなった砂浜が人でいっぱいになってたことです。昼さがりの一番暑い時間帯だからでしょうか。この人達はどこから湧いてきたのでしょう。水着を売ってる人までいました。

　帰りの切符を買って桟橋を歩いていたら私達が乗る前にフェリーが出発してしまいました。右の写真は次のフェリーが着いたところですが、きちんと接岸する前に乗客がどんどん降りてしまいます。降りる人が一段落したところで、車が降り始めるのですが、桟橋に人がいっぱい歩いているところを強引に車が通っていきます。

　このフェリーに乗り込む客の中に、ウェディングケーキらしきものを持った人がいました。そのケーキはむき出しになっているのです。向こうに渡ったらすぐのどこかに持って行くのでしょうか。何かにぶつかってつぶれたらどうするんだ、と思ってしまいました。きっと、その時はその時で何とかなるのでしょう。ケセラセラの歌が急に思い出されました。これはスペイン語らしいですが、ポルトガル語のようにも聞こえます。だれもこういう表現はしませんが、なるようになるさ、とみんなが思っていることは確かなような気がします。